

伊那市 50 年の森林（もり）ビジョン策定委員会 会議概要	
会議名称	第 2 回 伊那市 50 年の森林（もり）ビジョン策定委員会
開会日時	平成 27 年 1 月 27 日（火）午後 1 時 30 分
閉会日時	平成 27 年 1 月 27 日（火）午後 3 時 55 分
場 所	伊那市役所本庁 4 階 庁議室
出席者	<p>策定委員アドバイザー 独立行政法人 森林総合研究所 理事 鈴木 信哉 林野庁中部森林管理局 南信森林管理署長 田中 徹</p> <p>策定委員 委員長 信州大学農学部教授 植木 達人 副委員長 上伊那木材協同組合 理事長 都築 透 独立行政法人森林総合研究所 領域長 山田 茂樹 伊那地区 橋爪 俊夫 高遠町地区 伊東 一 伊那地区 加納 ます枝 高遠町地区 伊藤 のり子 長谷地区 市ノ羽 茂則 伊那市西春近諏訪形地区 区を災害から守る委員会 副会長 酒井 卓実 株式会社 DLD バイオエネルギー事業部 木平 英一 NPO 法人 伊那谷森と人を結ぶ協議会 理事長 稲邊 謙次郎 有限会社 平澤林産 代表取締役社長 平澤 照雄 上伊那森林組合参事 森 敏彦 上伊那森林組合参事 バイオマス・エネルギー室長 寺澤 茂通 国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所 砂防調査課長 鈴木 豊 長野県上伊那地方事務所林務課普及係長 小林 健吾</p> <p>事務局 6 名</p>
欠席者	<p>策定委員 NPO 法人 森の座 理事長 西村 智幸</p>
議 事	(1) 課題の整理と抽出 (2) その他
資 料	(1) 会議次第 (2) 第 2 回 伊那市 50 年の森林ビジョン策定委員会資料 (3) 伊那市の森林の変遷（空中写真） (4) 課題となる事項の整理と説明
議 事 録	1. 開会

2. 委員長あいさつ（植木委員長）

今年、この策定委員会では、骨格の部分で議論する。50年のビジョンであるので、現状では課題があるが、理想や夢を議論して、多くの積極的な意見をいただきたい。

前回の委員会では、現状をまとめて課題を議論した。第2回の今回は、事務局により整理された課題を見ながら、更に突っ込んだ議論をしたい。そして次回からは具体的な策定の内容について、理念や具体的な目標をまとめ、形を作っていく。

【前回の欠席者による自己紹介】

都築副委員長

市ノ羽委員

3. 協議事項

（1）課題の整理と抽出

植木委員長より、配布資料及び議論の進め方について説明。

事務局及び植木委員長より、配布資料の空中写真についての説明。

【意見交換】

（委員）

西春近の山にはカラマツがあるが、ササが生い茂っていて、間伐しても他の樹木が発生しない。皆伐した場合の手当の方法が気になる。

（委員長）

カラマツは、比較的光が入り更新がうまくいけば良いが、標高が高い所でもササに覆われる場合には天然更新は難しい。光が入って、表面の肥沃な土壌がほとんど取られていて他の植生が入りにくいようなところにカラマツが出てくることはよくあるが、長生きするかどうかはまた別問題である。山を作るためには、ササ地のカラマツを皆伐してもう一回植栽することになってくる。更新方法や上木の伐採方法については、検討する余地はある。西春近は標高1,500mから1,600mでカラマツの適地だが、広葉樹でも合うかもしれない。

（委員）

カラマツは標高が2,500mから2,600mの所では不足している。100年もしくは200年経ったときに、そのままの状態が残るのかと心配している。現在、径が30cmから40cm前後のものが一番利用されているが、50年、100年後になったときはどうなるか。カラマツは雪害や風害に非常に弱い。皆伐してしまうと多分植えないだろうという意見もある。循環を考えるなら、樹種をカラマツという限定ではなく、価値のあるものや、環境に良いと言われるものにしていく。

（委員長）

カラマツに対する評価は賛否両論である。カラマツは高標高地あるいは緯度の高い地域に適するが、日本において最も良く適しているのは信州である。カラマツの強さ、色、

艶、材の特質から、信州のカラマツは良いという評価を得ている。利用範囲がこれから拡大してくるかもしれない。ただ、植える適地かどうかという問題や、芯腐れ、水の問題もあり、学術的にきちんと整理しなければいけない。

(アドバイザー)

「信州カラマツ」は非常に評価が高い。今、イギリスに生えているカラマツは、ジャパニーズラーチとヨーロッパアンラーチを掛け合わせた F1 がほとんどである。製材で出して、人工林カラマツは 1 m³ 2 万円くらいだが、天然カラマツだと 1 m³ 100 万円を超える木もある。天然カラマツは 150 年を超えると価格はおよそ 10 万円を超すため、再造林意欲がでてくるのではないかと思われる。拡大造林においては、植えた結果、良い場合も悪い場合もあるので、結果で判断する方法もあるのではないか。

(アドバイザー)

長谷黒河内の国有林内で実際 107 年生の人工林の小面積の主伐をしているが、芯腐材はほとんどない。良い所では 1 m³ 3 万円強くらいである。大径材で、材長が 4m50cm 前後のものも出ている。

もし、南アルプス周辺、伊那市管内の国有林で、皆伐して新植する場合には鹿の為の防柵が必ず必要になる。また、伐採と造林を同時に行うならば、小面積でパッチ状に切っていく方法が、予算上も景観的にも優れているのではないかと考える。

(委員)

どう売るか、ということを最初に考えるべきであると思う。

地場消費は大事だがそれが難しいとなると、広域流通という話になる。カラマツの場合はそれが可能な状況になっている。原木市で、どのような買われ方をして、どのような物を買われるのかということに合わせて揃えていけば、ある程度値が出たりするということが当然ある。

(委員長)

信州カラマツは全国区になれるかもしれない。信州のカラマツは戦前から植えられており、良質材で形質もいいし、高齢級で良いものがある。世界的にもある程度評価されている部分もあり、非常に可能性の高い木になるかもしれない。これを消費する側から見たら、さらに可能性が広がるのではないかと考える。

(副委員長)

ブランド化された信州のカラマツは県外の集成材メーカーが買おうとしているが、今現在、合板メーカーがかなり小径木でも持っていつてしまうので、材が足りないような状況である。F パワーの動きもあり、カラマツの加工、バイオマスの使用もあって、今後材がかなり品薄になっていくのではないか。

(委員長)

信州カラマツの反り、ねじれ、ヤニツボ等の色々な問題は徐々に改善されており、使い勝手が良い。強度があるということが、カラマツの強みである。

(委員)

カラマツは現状、標準径を超えているが、成長期での用途は限られている。過去には公共部材として多く使われており、神社仏閣には銘木がある。その段階まで先人が植え

られたものをどう育てていくのが以後の 50 年間のポイントになる。また、今後主伐期あるいは間伐期になったときに、この地域の山をどう育てていくのか、造林をどうしていくのがポイントになる。適地適木、山菜業、木材利用をある程度明確にし、はっきりとした形作りをしていくことが山造りの根本に触れるのではないかと。

アカマツについては、松くい虫被害をどう食い止め、解消していくのかということが一番のポイントである。伊那マツには、これだけ赤みのさしたアカマツは他にはないという評価があり、伊那マツの重要な使命と責任を育てていくことが大事であると思われる。

(委員長)

カラマツだけでなく、アカマツ、かつては伊那マツと言われた時代もあり、素性が良く、色も良くて、もしかしたらこの地域はアカマツの生育には良いのかもしれない。

(委員)

まず、木に価値がある、少しでもお金になる、といえば、森に手を入れる人が出てくると思う。それから、山を歩くと、広葉樹があって、カラマツがあってヒノキがあって、ケヤキ、ブナがある。山を目で見て楽しむというのが基本なので、山を見たときに、色々な木を見ることができると嬉しい。

(委員長)

伊那市のこの山を扱うにあたり、どうやって林業が産業としてうまく位置づけしていく仕組みを作っていくかというのが課題だと思う。様々な樹種をどう活用していくか。

(委員)

カラマツを植えたことにより林業が衰退していった。つまり、植えた後何もしてこなかった時代がかなりあった。それ以前は農林業、つまり農業と林業が一体化していたが、林業が離れ、農業だけになり、森が荒れていったという経緯が見えてくる。

広葉樹の中に針葉樹もあった、かつての薪炭林を再生することによって、農林業はまた復活し、良い材価になるカラマツもそこで生きてくると考える。いい森作りには、50 年放っておいたのだから、また 50 年かけなければならない。そのようにして山造り、森造り、人造りをしていかなければいけない。

(委員長)

戦後、時代は拡大造林から始まって公益機能を重視する方向へ変わっていった。それにより農山村における労働力が都会へ流出し、木材そのものが海の向こうからやってきて、農山村ががらっと変わる時代になった。それ以前は農林業が一体で、特用林産も含めて山の価値があった。

単一なカラマツだけではなくて、他の樹種も含めて、しかもその周辺にある色々な特用林産物、たとえばアカマツであればマツタケの問題も含め、いかに地域資源を豊かな多様なものとして認めて、育てていくかということが大事だろう。

(委員)

カラマツばかりでなく、スギ、ヒノキ林業の地域も同じであるが、農林複合経営というものをどう再生して地域振興を図るのかという問題と、川下の加工側に対して、山側はどう対応すればいいのかという二つの問題がある。ただ一般的には、50 年 100 年の色々

な変化に対応しやすいのは、多様な森林だという考え方はあると思う。

(委員)

カラマツが植えられてきた理由は、伐採後、早急に山を回復させるため、成長の早いカラマツが選択されたからである。また、電柱材、枕木材として使われていたが、高度成長期と共にコンクリート製品や鉄鋼材に変わってきたことにより、カラマツ林業がなかなか成立しなくなった。その中で、薪の利用や、合板の利用から無垢の利用に替えていこうという、人の意識的な部分で変わってきており、伊那市でも学校の学習机の天板を無垢に張り替えたり、特別教室の椅子を国産の無垢材に替えたりという活動を展開している。また、薪ストーブの利用が非常に多い地域だということも、時代の潮流であるので、それに乗るための知恵比べだと思われる。今あるカラマツを否定的な目で見るとはならず、将来に向けて活用方法や特性を考えていくことが我々の役目であると思う。

(委員長)

不在者の増加や獣害対策により森林整備されていない里地・里山の環境の維持はどうしたらよいか。それから、木材生産後、森林の持つ機能を維持し損失させないための森造りはどうするか。更新技術の問題もある。苗木を供給できる体制や植える人の状況の変化をどうするか。皆伐の規模をどうするか。森林を含めた自然環境関連の産業創立、再生、自立はどうあるべきかというところまで踏み込んで課題として出しておく。

(委員)

現在4~50年放置され、藪になった里山が多いが、補助金もなく整備がなかなかできない。それがいろいろな悪い方に影響を及ぼしているとわかっていながら、手をこまねいている状況である。獣もおり、怖くて入れない。人が入っていける環境を里山につくることができれば、かなり整備が進むと思う。

(委員)

山に獣の食べる物があって、動物が山で生活できれば里には下りてこないのだろうと思う。今、野菜などを作っても、動物の食べた残り物を私達が食べているという状況で、それが続くと、農業をやる人がいなくなってしまう。

(委員長)

どう獣害と共存していくかという問題がある。伊那市では、一方では生物の多様性という観点からそういったものが住めるような環境を作りましょうという考え方もあるが、その場合には我々の生活が脅かされるという大変大きな問題があると感じている。

(委員)

西春近では山作業を行うことで山を管理している。自分たちの山は自分たちで守り、山を覚え、知ってほしいということが狙いである。そのようなことをやっていかないと里山を守っていくことができない。このことを実際、里山を持っている皆さんがどれだけ認識しているかということも一つの課題である。また、観光のためだけの山の日ではなく、里山を守っていくという方向へ転換していくとよいと思う。里山にいかに入るのであるのかということを中心に考えていくことが、自然に山に関心を持つことに繋がるのではと思う。

(委員)

ストーブなど生活の中で木を使っていると、圧倒的に山との距離が近くなり、山に入る人が増える。やはり地元の人が地元の木を使っていくことが一番大事だと思う。

(委員長)

自分たちの生活の中で当たり前のように木を使うことが、山との距離を縮めるきっかけになる。そのためにはどういう仕組みを作っていくか。

(委員)

里山の管理方法には、個人の財産としての管理、あるいは広い区分で関係者が管理する山としての管理と、二通りある。いわゆる経済活動の中で再生していくということは、個人ベースで再生に繋がるという方法である。今の国民のニーズに応えるには、所有権は動かさなくても、利用権だけある使い方という方向もある。

(委員長)

所有権というかなりハードルの高い問題をどうオープン化、共有化していくかということである。山村の資源が様々ある中で、里山に人が入るためには、生活の中に木材を意識させることが大事であるし、個人の所有山林をある程度解放し利用できるような仕組みをどう作っていくか。

伊那市では新宿区と連携しながら色々な活動を行っている。民有林においても様々な人が山林を利用し、活用できる仕組みが必要である。

(委員)

森林を所有しているが境界がわからない人は多い。境界を明確にしている人は、マツタケ山等、山を経済林として考えている人しかいない。しかし所有権はどうしても無視することはできないため守っていく。そのためには、この「50年の森林ビジョン」のようなものの中で、大規模な面積の中で管理できるような新しい方法を考えていく必要があるのではないか。

(委員長)

所有と利用の分離。このところで新たな仕組みができれば、山へ入る人が増えるかもしれない。

(委員)

一部の地域では、何々水利組合有林という感じで、要は自分たちの資源確保するためにその一体を共有財産にしている。もちろん所有権は分かれているが。それだったり防火帯というのがあり、火の延焼を防ぐために、一部を皆伐してある帯状のところがあったりするが、それらも当然、共有の財産として所有権を横断して持っている。

(アドバイザー)

今、全国的に非常に問題となっているのは、人がいなくなり、学校林組合や集落有林の権利の放棄が増えている。50年先のビジョンを考えたときに課題としてあげておいた方がいい。

(委員長)

これは全国的にどこでもある深刻かつ緊急の課題である。

では、担い手はどうするのか、地産地消はできないのか、バイオマスとしての利用、

農村部のあり方を含めて、ご意見いただきたい。

(委員)

今、一番の課題は、人材が足りないこと。山、木、市場に詳しい人材がいない。資源の管理や、現場作業の人材ももちろんであるが、その上の、それを束ねる人材を作っていくことを考えた方がいい。

また、これから 50 年先、市場や社会の変わり方がわからない状況の中で、柔軟に考え方を変えていくことができる人材が必要である。そういった人材が育っていれば、どんな状況においても山は良い方向に向いていくのではないか。フォレスターと言われる専門的な知識と経験を持つ人材を、50 年で育てていくことが一番重要である。

(委員長)

人材育成について、例えば林野庁ではフォレスターの育成、県ではフォレストコンダクターの育成と、色々考えている。人材が必要だということはどこでも言われることであるが、伊那市は自ら確保して、そして地域に根差しながら農林業をトータルで見ることができ、しかも柔軟に時代と共に対応でき、川下までの流通、加工、商品化までも見通せるような、トータルなコーディネーターというのが独自にいても良いのではないか。

(委員)

林業生産から公益的機能、レクも含めて、山のことをしっかりマネジメントできる人間を市に配置し、市有林を管理させて、ある程度お金を儲ける形にもっていけるようにする姿を考えたが国よりも地方自治体からの方が動きやすいのだろうと思う。

(委員長)

市町村レベルでそういった人材を作り、育成することは大事だと思う。伊那市と県とでフォローアップしていく。

(委員)

林業の方にも国を動かしてでも、農村を活性化させる為の政策を講じてもらわないと。農林業一体型で山村を、中山間地みたいなものを構築していかなければ。

(委員長)

単一産業ではなくて複合的にやることが農山村は健全で、うまく仕分けしながらやるのが大事だと思う。そういった中で、人材育成と、土地利用あるいは資源活用を考えていく必要がある。

森林資源の地産地消については、課題もあり難しいが、私自身は地産地消というのは基本である気がする。50 年を通してどういう仕組みを作っていくか。

(委員)

バイオマスを間伐材で充分使っていくという展開をしていけば、地産地消に非常に有効であると思う。また、家を建てる際には地元の木を使っていただく PR が必要である。小学校では、子どもの机が地元のカラマツ材の天板に変えているところもあるが、まさしく地産地消になっている。

(委員)

林業経営において、その一番頭に立つ人達がポテンシャルを強く持つと、結構影響力がある。フォレストマネージャーは伊那市が取るべきで、僕らはそこをサポートして、

周りの人たちにも協力してもらおうという形を取れば一番良いと強く感じた。

特徴がなければ地産地消にもならない。私が思っているのは「トチの実」を植えることで、食害に遭わないため生存率が高い。芯はあまり大きくなく、枝下をきちんと作れば価値が出る。市有林へ100本植えたら100万円になるという計算であるが、環境さえあれば可能性は高い。勇壮なビジョンで地産地消を考えたらどうか。

(委員長)

カラマツは特徴あるから良いが、今まで扱われなかった広葉樹については、作る利点をわかっていないかもしれない。伊那市の特産として広葉樹生産があるのかもしれない。

(委員)

伊那谷でトチを大量に生産しても、材積が足りないため価格が暴落しない。また、色々な使い方ができるという利点があり、狂いがなく、軽い。

(アドバイザー)

今は白い家が流行で、白い板がもてはやされているため、トチの木や広葉樹が非常に高い。今は目が揃わなく、厚いものを使った方が高級品である。多種多様のものの評価が高いため、広葉樹が入ってしまい造林に失敗した山だと思っても、実は宝の山かもしれない。そういう意味では、多様なものを育てるのは非常に良いが、藪だけは避けないと多様な森とは言えない。

人材育成に関して、最近全国で実務の林業を学ぶ学校が流行っている。そういう形態でないと林業へ入ってこないし、農業より林業のほうが雇用労働力で入りやすい。そういったことをうまく活用することが大事である。家に田んぼと畑と山が付いている家の用意があれば来たいという若い人も結構いるため、上手くいっている自治体の例を少し勉強してもらったらいいいのではないか。

地産地消に関して、田舎の村に鉄筋コンクリートの学校が建った頃、都市と同じ建物が建ったという喜びや自慢があったが、今は木材を使うところが良いのだというように頭の発想を切り替え、設計を見直せば、地産地消はできると思う。また、地元の物を買わなければ地産地消で金は回らないため、その発想を切り替えないとなかなか難しい。

(委員長)

田舎の良さをどう出していくかということが大事であると思う。

森林経営で50年後をどうするかという場合、どういう状況であろうともそれに対応できる多様な山造りが基本である。また同時に、良質材を作っていくことをベースに置き、仕組み作りを考えていかなければならない。

伊那市の特徴であるエコパークやジオパークについては、もっと広い意味で森林・林業を捉えた場合にどうしていくのか。これを有効に使って宣伝していくことも可能であるし、一方で産業としての林業、農山村が活力を持つということも一体となってしていく必要があると思う。

また、災害に強い森について、安全で安心な山造りをどういう仕組みで根付かせるか。

(委員)

災害に強い森、強い木を育てることは大事である。ちょっとした土砂災害で少し崩れても、木が止めてくれれば民家まで被害がない。強い森や里山が守ってくれることがで

きると、地域が安全になり、安全なところでは子どもが遊ぶことができる。里山で遊んだ経験が、大人になって、山はおもしろい、楽しいということに繋がる。災害に強いということは、人が育っていく地盤にもなると考えている。

(委員長)

災害に強い山を作っていくために、市民の役割としてどのような活躍の場があるのだろうか。市は基本的には防災計画、防災システムを作っているが、地域住民が意識しなければどうしようもないという部分もある。どういう状況が危険なのか、住まいの裏山はどうなっているのかということきちんとして理解していなければ、なかなか山で押さえることはできない。市民の意識の変化が必要である。

(委員)

砂防事業に対する市民の認知は低い。山の手入れも、効果が10年後に出る保証もない中での作業になるため、災害に強い、防災という面での森作りというのはイメージしにくいかもしれない。

(委員長)

結局、地域住民が山造りや森林整備に関わっていくことが大事であると思う。遠くまで来ている人と山との距離をどうやって近付けるか。その手法として、山から得る恵みを我々は享受でき、木がどういうものであるのかを理解していくという活動である。森林整備の活動を通して山を強くしていくということになるのだろうか。

(アドバイザー)

昔、子どもの頃、里山の中を走り、色々な経験をした楽しい思い出があるから、今の里山について「昔はこうではなかった、何とかしたい」という思いが皆さんの中にあると思う。その思いをどう大事にしていくか。そこがきっかけになり、どんどん発展していくのかなという個人的な思いがある。

(委員長)

災害に強い森林を造ること自体を、我々の生活の一部の中で進められていくことが大事である。獣害で農産物の被害を受けていることについて、県として、伊那市はどうすべきか。

(委員)

農業や林業で獣害が多いということは、逆に言えば生き物たちが生きられる場所があるということであり、良い意味に捉えれば良い特徴でもある。考え方を柔軟に、どのように活用、対処していったら良いのかという知恵を出し合うことが非常に重要だと思う。

(委員長)

環境林としての森林を伊那市はどのように展望するのか。さらにエコパーク、ジオパークがある。これを今後どう具体的に50年を見通した展望を綴っていくかということが重要で、また、民国一体というのは自ずと進んでいく。

(アドバイザー)

トータル的にコーディネートできる人を育成できれば、その人を核として、隣接している国有林と民有林が一緒に行うことは可能であり、木材の安定的供給に繋がってくると思われる。

(委員長)

IT化に関して、森林の情報を市民に流す仕組みや、森林情報の取得方法、GIS やリモートセンシング等情報の精度について、伊那市としてどう考えていくかということも大きな課題である。

(委員)

森を知らないというのが一番の課題である。ご当地検定のような「もりもり検定」で、ひとつの遊びから森林に関心を持ってもらうことはどうか。

(事務局)

事務局案として想定される課題は、利用と保全も含めた「資源構成」。「林業活動エリアと保全エリアの区分」。「人材育成」。それと「農業と林業の複合体」の産業が伊那市にあり、それが木材産業と結びつき、それがまた農林業という産業、営みの方に戻ってくるような流れが、主な課題ではないかと考えた。また「資源・産業・活用」という形で、特に地区・地域、地元の皆様方の資源、産業、それを地元の皆様方で活用していただくような流れを想定している。

また、里山を守り、活用する時には、農業と林業は欠かせないので、農林業「アグロフォレストリー」的な発想も必要であり、また循環するシステムを構築していくことも必要ではないかと思われる。

そして、やはり行政からの一方的な発信でなく、集落、地区、地域といった流れで、盛り上がるようにしていければと考えている。それと地域の発信、特に伊那市全体の農林業をコーディネートできるような人材の育成が重要になってくるのではないかと。行政からの立場から、新たなる試みに対しては積極的な支援をし、50年後の姿を見据えた中で、それと意反する事につきましては、ガバナンスもしくは止揚をさせていただければと考えている。

(委員)

今、里山の整備が非常に遅れている。境界や財産的な問題があり非常に難しい。地域的なことから考えると、伊那市のどこの森林を整備しても補助対象となるようにしてもらいたい。松くい虫対策や、自分の山の間伐をする場合でも集約化の取りまとめがあると、労力をかけなくてもできるのではないかと思われる。

(委員)

平成26年4月から森林経営計画から区域決定が入っており、その中で「市町村長が定める区域内において」という市町村森林区域整備計画で指定をする。その中で立てられる計画があるので、そういうところでは使える可能性もある。

(委員)

市民全体で考えていくには、森林環境教育が制度化され、子どもが教育課程の中で学ぶことができれば、関心の持ち方が変わってくると思う。

(委員)

山に価値があり、山で働くことが格好良くて稼ぎも良いという50年後にするためにはどうしたらいいか。

(委員)

子どもの頃に伐採の体験をすることや、植林の方法を学ぶことは大事であると思う。ドングリをどの向きに植えたら、根や芽が出るのか。尖ったところが土に近いと、大地を探して芽が出て、そしてクヌギになる。そのようなことを子ども達に教えていくことも地産地消になる。

(委員)

高遠は生産森林組合が 17 組合あり、設立された 40 年代前半から 50 年代は木材の価格もそれなりの経営ができるだけのものがあつたが、現在は経営的に非常に難しくなっており、解散を考えないと仕方がないという逆向きの方向で動いているのが現状である。森林整備、里山整備をするには、生産森林組合や共有山等と総合的にできる手段を見つけてもらいたい。

(委員長)

地域の様々な生産団体や組合をどう生かすのか。市ができることや、様々な法規制の中で動いているところもある。それらをどのように識別するかということは今後の課題である。

4. その他

(委員)

1月30日(金)開催「もりもり上伊那 山の感謝祭」資料配布、案内。

(委員)

2月7日(土)開催「薪のシンポジウム」チラシ配布、案内。

(事務局)

今後のスケジュールについて(予定)

1. 第3回委員会：平成27年5月
2. 現地視察開催
3. 第4回委員会：平成27年10月
4. パブリックコメント：平成27年12月
5. ビジョン策定：平成28年3月

5. 閉会